
もしとあるの世界にあの作品のキャラがいたら

ハムカッタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もととあるの世界にあの作品のキャラがいたら

【Nコード】

N9441T

【作者名】

ハムカッタ

【あらすじ】

もととあるの世界ににあの作品のキャラがいたらという作者の妄想の形で禁書とのクロスを描いています。

第一話 とある一家の学園都市旅行

「ここが学園都市か、さすがに科学が発達しているだけあつてすごいな。オ、あれはロボットかな。」

「ほんとね、あなた。」

運転席に座る野原ヒロシが感嘆の声を上げ、助手席に座る野原ミサエもそれに賛同する。彼らは、今ヒロシの運転で旅行にやってきていた。その旅行先は、常と違っていた。

そこは、学園都市と呼ばれ科学技術が20数年も先行していて、日本国内にありながら排他的な治外法権ともいえる都市だ。外部の人間を嫌う傾向が多いそこに何故いるのかというと、それはひろしが福引で当てたためだ。

学園都市は、ただ単に科学技術力が発達している都市ではなくそれと同時に超能力開発を行っている。とはいえ、それは未成年者を対象にしているし学園都市外の人間の行き来を制限している。批判も学園都市に対しては、意外に多いのだ。

その批判をかわすために学園都市側は、福引という形で学園都市外の人間を学園都市に招待していた。これも当てても実際には行けないことが多いのだが、野原一家は幸運な側だった。

もちろん二人の愛する息子の野原しんのすけと娘の野原ヒマワリも後方に幼児用のシートベルトを着けて座っていた。ヒマワリは、ヤスヤスと寝ているがしんのすけは窓の外を見入っていた。

ヒロシと同じで学園都市に見入っているのだろう。いや、案外窓の外を通り過ぎる女性に見入っているのかもしれないが。

とにかく彼らの学園都市での楽しい旅行が始まるはずだったのだ。しかし、それはいつものように大規模な事件に巻き込まれておじやんになってしまうのだった。

それは、幻想殺しの少年と完全記憶能力の少女とそれをめぐる魔術

師との戦いに巻き込まれたためだった。

幻想殺しの少年、上条当麻と世界を救ったこともある心優しい五歳児野原しんのすけとの邂逅。

「俺はな、しんのすけ、大切な人を守りたいんだ。幻想殺しなんて特殊能力を無効化するだけで、それ意外のちからはないけど大切な人は傷つくのは見たくない。だから俺は、戦っているんだ。」

「でも、でも、とーまはそれで傷ついてるんだよね。いんでつくすちゃんにも心配をかけてまですることなの。オラも父ちゃんや母ちゃん、ひまわりやほかにも大切な人を守りたいって思うけど大切な人を守りたいからって大切な人に心配かけて、傷ついてまでやるなんて間違ってるぞ。」

魔術師に対する怒りが爆発する野原一家

「フン、インデックスは魔道書に対する知識以外なんの価値もない。崇高な魔術のために犠牲になったところで問題はない。」

「ふざけんな、いんでつくすちゃんは、いんでつくすちゃん自分で生きていたいって意志があるんだぞ。それを無視して自分の目的のために利用するなんてふざけんじゃないぞ。」

「そうだ、それが大人のやることか。てめえの汚い目的のために子供を傷つけやがって。」

「そうよ、あなたは間違ってるわ。」

「よし、そうと決まったら、野原一家ファイアー！」

「ファイアー！」

魔術師との最終決戦

「くらえ、俺の三十年物の靴下。」

「ぎゃっ、臭い。臭い。」

インデックスから魔術級と言われた靴下を使って倒すひろし。

「くらいなさい、みさえボンバー。」

「うわあ、思い助けて、死ぬ。」
自分の体重と身体能力を生かして敵を倒すみさえ。

「よくもやってくれたな。我が魔術を持って貴様を葬ってやろう、野原しんのすけ。くらうがよい。」

敵のボスである魔術師の腕からすさまじい勢いで青白い電光がほとばしる。触れてしまえば肉体だけでなく魂さえも汚染してしまえる威力の魔術だ。

だが、「なっ」と魔術師が驚愕の声を上げる。そう野原しんのすけはその攻撃を回避したのだ。

伊達にサブマシンガンの攻撃を回避できるわけではないのだ。

敵の魔術師のボスを驚愕させる身体能力を発揮させ対峙するしんのすけ。

こうして野原一家の学園都市旅行は魔術師との戦いに巻き込まれることになるのだった。

クレヨンしんちゃん×とある魔術の禁書目録

第一話 とある一家の学園都市旅行（後書き）

題材は、クレヨンしんちゃんです。まあ現実には野原一家でも倒せないと思いますが、魔術との戦いに巻き込まれたらという形で書いてみました。

第二話 とある聖人の悲劇

「いやあ、あっち行きなさい。」

そう叫びながらある女性が必死の思いで疾駆していた。涙さえ浮かべながら走る様は、無理やり乱暴されるのを恐れて逃げているかのようだ。

とはいえそれは尋常な事態ではなかった。世界最大の宗教十字教の一角で規模がその中でも特に大きいローマ正教の総本山であるバチカン内部の関連施設内で逃げ回っているのだ。それも逃げ回っているのは、魔術という能力が十字教という宗教と関わりがあるのだがその中でもローマ正教の最終戦力とうたわれ圧倒的な霊的ポテンシャルを誇る聖人の集団である神の右席前方のヴェントなのだ。

その彼女が逃げているということは、彼女さえも圧倒する戦闘能力の持ち主から逃げているのだろうか？ いや、それは違う。追っている相手は、ただのエロ目的で殺す気はないのだから。

追いかけているのは、バンダナをまいた少年だ。日本から来たGSという民間の除霊業者に属していて横島忠夫という名前だった。そしてエロに対する情熱で非常に有名な人物であった。

事の発端は、横島忠夫とその雇い主である美神令子はラプラスの魔というローマ正教内に危険であるために倒すのが難しいうえに未来を予知できるという能力からメリットもあるため拘束されている悪魔にかかわる依頼でローマ正教に来ていた。

依頼があるといっても依頼があるまでの間、横島はローマ正教から提供された宿泊施設内をさまよっていた。

そのうちにどこがどこなのかわからなくなってしまった。要は、迷子である。そのうえ本人が知らないだけでローマ正教の裏面ともかわりのある中枢施設に迷い込んでいたのだった。

「まいったな、美神さんに怒られちゃうよ。このままじゃ。」

当の横島は、そんなことを知らないために暢気なものだった。誰かに出会ったら聞こうという思いが実ったか、ドアが開き誰かが出てきた。

その相手が女性でしかも前方のヴェントであつた。

横島は、超ド級のスケベである。戦闘中にも女性相手にとびかかるほどだ。その横島が女性を見て、しかも天罰術式という敵意を向けさせ敵意をむえた相手を倒す能力のために顔に特殊なメイクを施していない状態の彼女を見てとびかからないわけがない。

身の危機の迫る由を知らない前方のヴェントは、そんなことが起こるとも知らないで部屋を出ようとしていた。だが、突如彼女はぞくぞくするいやな予感に襲われていた。

そして次の瞬間には、「お姉さん、いままでずっと愛してました。神の道につかえているのは承知ですが、神の道を踏み外しましょう。」と叫びながら横島にとびかかられていた。

咄嗟のことに即座に反応ができなかったが、流石に神の右席だけあつて横島を床へとたたきつけた。

（一体、何なのだ、この男は。姿からして敵ということはないだろうが、まさか迷い込んだ民間人か・・・）

素早く思考を巡らせながら前方のヴェントは床へ目を合わせた。そこには先ほどの男が倒れているはずだったが、そこには誰もいなかった。

あろうことかその男はぴんぴんとした状態のまま、普通に立ち上がっていた。前方のヴェントの力をそこまでこめていないとはいえ攻撃を食らつてである。

そして今に至っていた。横島は、そんな目にあつても懲りることなくそのまま再度とびかかつていった。前方のヴェントは、その攻撃

に対処していたが、そのうち怖気に振るわれた。

自分の攻撃を食らって平然としているのもそうだし、それ以上に一応彼女は女性である。

体目当てに飛びついてくることと一応修道女であるためにそういった方面に対する免疫のなさから徐々に恐怖を怯え、その恐怖に負け逃走していた。

その逃走劇にも終わりは、来た。

「こら、あんた何やってんのよ。」

そう叫びながら現れたのは、金髪ボディコンに身を包んだ少年の雇い主の美神令子である。横島の姿が見えなかったから、探していたのだから横島は当然といえば当然だが女性にとびかかっていたのである。

これに怒りを覚えないわけがない。

雇い主の怒りを感じ取った横島は、180度方向転換し「ごめんなさい、美神さん。」そう叫びながら逆に横島が逃走を開始していた。「良かったよお。」とそれを見た前方のヴェントは、いつもと違う口調でホッとしたのだった。

そのあと、ラプラスの魔に騙されたせいとはいえローマ教皇に暴言を吐くなどを行いローマ正教には二つの伝説ができるのだった。

第三話 学園都市へ転校！！（前書き）

感想でGSとのクロスについてあったのでGSとのクロスを再度やらせてもらいました。次は別内容です。

第三話 学園都市へ転校！！

「今日は、噂の転校生が来ますよ～～！！男の子か女の子かは見てのお楽しみで！！」

さあ、どうぞ入ってください。」

そう述べているのは、月読子萌。学園都市に勤務する教師なのだが、成人女性だというのに幼児体型で不老不死の実験体ではないかと噂されている人物だ。

そして今日、上条当麻などの通う高校に転校生が来るのだ。それが元で熱血とまではいかないまでも根っからの教師の彼女は張り切っていた。

「どうも、転校生の横島忠夫です。今日からよろしくお願いします。あ、席どこですか？」

声に従いバンダナを巻いた転校生と思われる少年が入ってくるが第一声がそれだった。この時点で普通の転校生と異なっていた。普通の転校生ならステレオタイプだが、教師の指示に従って自己紹介してから席を指名されるのが一般的だというのにそれを無視したのだ。「横島くん、もう一回やり直しです！！きちんと自己紹介しなさい！！」

これに怒った彼女は、笑いながらも目は笑っていないという方法で横島を恫喝するのだった。

「はい、わかりました。」そのまま自己紹介をやり直す横島だった。

横島の自己紹介が終わると転校生への質問になった。その中から「特技は何ですか？」といった声上がる。

それに「うん、失敗してばっかだけどナンパすかね。」と爆弾発言をしてしまう横島。これを聞いたクラス全員が一瞬静まり返ってしまう。

「何とんでもないこといつてるんですか、他に何かないんですか？」
いち早く気をとりのおした子萌が注意する。教師以前に大人として
ナンパが趣味というのは注意しなければならぬのだ。

「うーん、それ以外だと除霊ですね。」

またしても爆弾発言してしまう横島。実際横島は霊能力者でアシ
ュタロス事件にも関わっているのだが、外部との繋がりが薄い学園都
市では大規模な核兵器を狙ったテロとしか学園都市には伝わってい
なかった。

学園都市は、超能力の開発を行っているがそれは大脳生理学などに
基づいた科学的なものでありオカルトな精神エネルギーではない。
学園都市外でも科学が社会の基盤であるがために、否定的でもまだ
GSなど認知度は高いのだが学園都市での認知度は遥かに低かった。
「除霊って馬鹿にしてるのか。」

そう生徒の一人上条当麻がいうとそれ以外の生徒も罵倒というわけ
ではないが、否定的な意見を「そうだ、そうだ。」「そんなのある
わけないだろ。」などといった風に出し始めた。

「ちよつ、待ってくれよ。俺は、一応学園都市に転向する前はGS
やってたんだぜ。ほら、日本GS協会からの免許だ。」

そういつて横島は、懐から日本GS協会が発行されているGS免許
を取り出した。とはいえそれを見せても収まりはしなかった。唯一
口火を切った上条当麻と土御門という生徒が信憑性がある、確実に
できると特殊能力に関連して思っていたが、ほかの生徒はそう思っ
ていなかった。

「じゃあ、霊能力を使えるっていうならやって見せるよ。」

「ああ、いいよ。やってやるよ、吠え面かくなよ。」

そついうと同時にさすがにここまで否定されて頭に來ていた横島が
霊能力をその生徒の言葉に従い発動した。とはいえ霊能力を発動し
たといつても何が変わったわけではない。

式神や霊的エネルギーといったものが現れたりはしなかった。唯一
横島の位置が霊能力を見せろといった生徒の机の上に乗っていたこ

とを除いて。

単純にこれだけならただ単に走っただけともいえるだろう。とはいえその走った姿がたとえスポーツ選手だろうがなんだろうが人間である以上は捉えられるというのに誰も捉えられなかったというのは以上だ。身体能力強化系統の能力ではなく超加速という時空に干渉する能力であり、かなり莫大な霊力を必要とする技だった。

「ほらな、霊能力はあるだろ。」

「単なる身体能力強化なら超能力にもあるぞ。高レベルの能力者なんだろ。」

それでもなお否定しようとするが、それは打ち砕かれた。「横島君は、一応能力開発を受けていますが、身体能力強化系統ではありませんよ。ですの彼の言っていることは本当です。それはともかく横島君、机から降りなさい。」

こうして横島の転校初日は終わった。なぜ横島が学園都市に来た目的とは一体？

G S 美神極楽大作戦×とある魔術の禁書目録

第三話 学園都市へ転校！！（後書き）

とあるの魔術とGSの霊能力については別物なので能力開発を受けても問題なしにしました。

第四話 とある刑事のレクイエム

学園都市でかつて幻想御手事件と呼ばれるものがあつた。その事件は、木山春美と呼ばれる人物に行われ、悲しい真相が背後にはあつた。この事件は解決したかに見えたが、続きがあつた。

この事件の主犯の木山春美は学園都市の拘留施設で拘束されていた。だが突如として彼女の開放と学園都市外への退去が行われた。その数ヶ月後、彼女は覚悟していたが変死を遂げてしまうことになる。

おぎなりのお茶をにごすかのような捜査でその死は疑問が残ったものの打ちきられた。だがその死を怪しむものがいた。

その名は杉下右京と亀山薫。警視庁の陸の孤島と称される特命係の人間であり、そんな部署にしながら自分達の信じる信念に従い政府の暴走すら解決したほだ。

いつものように疑問から捜査を開始する右京と薫。だがそれは巨大な闇に触れるものだった。

「右京さんもしこれが、本当なら・・・」

「木山さんの死は口封じの可能性があります。ひよつとすると遥かに巨大な事件なのかもしれません。」

「杉下、悪いことは言わない。この事件からは手を引け。」

「官房長は、何かご存知なのですか？」

「政府やお前も手を出せる相手じゃないんだ、学園都市は。すべての事件を解決すればいいわけじゃない。」

老獪な小野田すら恐れる学園都市。果たして二人の刑事の運命は

！！

そして・・・

「右京さん、これでいいんですかね。実行犯は逮捕しても背後関係は分からないままじゃ何も終わってませんよ。」

「今は無理でも必ず、成し遂げて見せます。僕は諦めません。」

相棒×とある魔術の禁書目録

第四話 とある刑事のレクイエム（後書き）

相棒の右京と薫は国家の絡む事件も捜査してるので、学園都市を捜査したらどうかなど。

第五話 狂わされた記者（前書き）

リクエストに従って今回も書いてみました。

第五話 狂わされた記者

学園都市と呼ばれる都市が日本には、存在する。それは、東京西部と首都圏に含まれる三都道府県に至るまで開発した巨大都市である。学園都市という名の通り、それは研究機関が立ち並び研究活動が行われ数百万人単位の学生が日々を暮らしているが、この街の一番の目玉は超能力開発であった。

超能力といってもオカルトなものではなく、量子力学的な仕組みを人間の脳を元に働かせるのが超能力の原理だ。だが、これには批判が存在する。

学園都市は、作られてからはほんの短期間は日本の法律が適用されていた。しかしそれも数年の間で学園都市が科学技術力の急激な発展とそれに伴う政治的影響力の拡大により実質的な治外法権を確立し、外部と学生の親を含み接触を極端に拒むようになっていた。

これには、批判が集中した。元々超能力開発を受けるのが未成年者であり、脳をいじるといふ実質的な人体実験が行われていることや高レベルの能力者を一方的に優遇し他の学生より高待遇を与えるという制度が行われてから、人権団体などから徹底的な批判対象になっていた。そこへ来て外部との間に壁を作り極端に接触を拒むというのだ。批判が高まるのも当然だろう。

それを学園都市は、完全に黙殺した。批判が高まろうが政治的影響力をかなり持つようになった学園都市からすれば一向に批判を食らったとしても問題なかった。

そんな学園都市を追う記者がいた。シュバルツバルトという名のドイツの高名な記者であり、今まで数々の不正を暴いてきた。

その彼は、学園都市が外部との極端なまでに接触を拒むようになって

てから調査を開始するようになった。まさかとは思うが合法的な活動ではなく人体実験のようなものを行おうとしているのではないかと危惧したし、それ以外にも何かあるかのではないかと思ったからだ。

そして彼は、日本に來日し独自に調査を始めた。それによると面白いことが分かった。大規模な都市開発計画は建設省の認可が必要以上に周辺の地方自治体や住民の反対運動などもクリアすべき課題だ。また、治験などと同様に厚生省の認可も薬物を使う以上は必要だ。

この二つの省は、当所その計画には乗り気でなかったというのにその後突如として計画推進を積極的に行うように方針を転換していた。これらに伴い地方自治体も引きずられる形で推進派になったが、住民の反対運動はまだ続いていた。

東京の西部の開発の進んでいない地域といっても人は当然住んでるし、それ以外にも三都道府県にまたがっているのだ。

この住民運動はそれなりの規模だったが、収束が突然訪れた。運動を中心的に進めている住民が事故などによって死亡しているのだ。

確証がないが賄賂や殺人を行ったのではないかと彼は疑うようになった。ここまでなら別に何の問題もなかったかもしれない。彼だけでなく他の新聞社も嗅ぎ付けていたし、高名な記者であるためネームバリューは大きいがそれだけの話だった。

彼の運命が変わるのはこの後だった。それは学園都市の人体実験を行っているデータと外部と隔離することでさらに人体実験を進めようという計画のデータだった。

学園都市内で人体実験を行っている人間も人間だ。中にはただの気違いや利己的な人間もいるが全てが全てではない。

暗部の原型とでもいう組織に監視されているために自分が告発することはできないが、最後の望みとして反発を感じた研究者が彼の手に渡したのだった。

それを見た彼は当然のごとく憤った。まるでかつてのナチスドイツ、いやそれよりも遙かにたちの悪いかもしれない人体実験の詳細とそれを拡充しようというのだ。まともな人間なら誰だって怒りを覚えるだろう。とにかくこの証拠を元に記事を書けば事態は解決するはずだ。世論は全て反学園都市に向かうだろうし、警察も一斉捜査に乗り出すはずだ。

それを記事にさえできればだが。残念なことに彼が記事にすることはなかった。

その日彼の止まってているホテルを火災が襲った。電気系統の事故によって起こった火災であり、スプリンクラーがうまく作動しなかったために鎮火が遅れ、結果的にホテルの殆どは火災を食い止めても原型を止めず、死傷者が数百人単位で出てしまった。

シュバルトバルトも公式にはこの火事で死んだはずだった。死体はでなかったが火事なら死体は出ないことはある

だが、実際には彼は生きていた。名乗りでなかったのは、自分が暗殺されることを恐れたためだった。今回の火災は、スプリンクラーの作動が遅れたことといい自分に対する口封じと推測していた。殺されるかもしれないというのにノコノコ出ていく必要は、なかった。また、彼の内面が大きく変わったこともある。火事が元で目元はなぐ肉が直接見え、口は大きく裂け鼻はかけるといふ醜い顔に変貌していたがそれ以上に内面は変貌していた。

以前の彼は不正を許さずどのような理由があれ、犯罪を容認しない人物だった。しかし今は、学園都市の犯罪行為に対する怒りと自分の負った怪我がもとで完全に狂気に染まっていた。

犯罪行為を行う学園都市のクズどもは殺しても構いやしない、八つ裂きにしてやるという異常な復讐の渴望に満ちていた。

「許さんぞ、学園都市。この付けは払わせてやる。」

聞くものがあればゾツとしただろう憎悪に満ちた言葉を発していた。

それから数十年がたった。学園都市はますます政治的影響力を伸ばし自衛戦力という名目で軍隊さえも保有し、実質的な治外法権になっていた。そしてますます人体実験のたちは悪くなっていた。

「だがそれもこれまでだ……」

そう薄暗い闇の中呟く人物がいた。全身を包帯に巻き込んでいるがシュバルツバルトだ。

彼の立つ前には、巨大な異形の姿のものが立っていた。メガテウスと彼が名付けた巨大ロボットだった。

巨大ロボットといっても実戦における有効性は、歩行も含め確立されていた。人型の二足歩行のこれだけの規模のものは学園都市でさえも開発に成功していないし、機体に比べてという意味だが搭載されている小型のミサイルや高エネルギー兵器は威力が高く、余裕で特殊鋼すら破壊してしまえる。

これは、科学の産物ではない。こんなものは既存の科学で作れはしない。彼は学園都市への復讐のため裏の世界に手を伸ばした。

その中で彼が最後に復讐の望みとして見いだしたのは、眉唾物だが魔術という超能力とも違う特殊能力を扱うカルト集団だった。

殆どの集団は、協力しなかったがその中で協力を表明する組織があった。

学園都市を気に入らないが直接動くリスクがあるために彼を利用するつもりのようなだったが、それでも彼は構わなかった。

その組織の得意とするゴーレム技術をベースに反対はあったが戦車や戦闘機すら売り飛ばすというブラックマーケットとも接触してい

たために兵装系を科学技術とも組み合わせることにより開発されたのがメガテウスだった。

復讐のための剣を手に入れた男の復讐が始まりを開始した。

THEビッグオー×とある魔術の禁書目録

第五話 狂わされた記者（後書き）

作中に出てくる厚生省や建設省は、厚生労働省や国土交通省の前進の組織です。いつからできていたかは分かりませんが、本編開始以前の学園都市が関わるといふ設定なので過去の組織を登場させました。

第六話 学園都市へ転校！！その2

「学園都市へ転校しろだって！！どういことですか、美神さん、小竜姫様。」

そう叫んだのは、横島忠夫。ここは、美神令子除霊事務所の一室。そこにいたのは、いつもの面々だけではなく小竜姫もいた。

彼女は、外見だけ見ればジーンズをはくなど普通の女性に見えるが、実際には神族という世間一般で言ういわゆる神様に当たり、その中の竜神という存在に含まれている。横島たちとは、天竜同時の一件以来の付き合いであり、あの凄惨を極めたアシュタロス事件をもに戦った戦友でもあった。

その小竜姫がいきなり学園都市へ転校するよう言ったのだ、疑問に思って当然だろう。今まで彼女？の依頼を頼まれたことがあるので依頼がらみということは分かるが、何故転校しなければいけないのかその理由が分からなかった。

彼女は、説明を始めた。学園都市を作り出した学園都市統括理事会のトップであるアレクスター・クロウリーの正体が神族調査部の調査によって世間的に死亡した魔術師のアレクスター・クロウリーであることがかなり高いことが分かったこと、その調査はエイウスという不審な動きを見せていて行方をくらました神族を調査した結果分かったことであり、エイウスは以前にアレクスターとなんらかの契約関係を結んでいるためにアレクスター・クロウリーとともに何らかの計画を遂行している可能性が高いこと、物証こそ無いものの学園都市内で不審な動きがあることが分かったこと、神族でも調査を行うのが困難な政治的影響力を有しているために横島に調査を転校するという名目で行ってほしいといった。

「でもそれならエイワスツてやつを捕まえればいいだけなんじゃ？ 神族が関わる計画なら神族さえ排除すれば破綻するでしょうし。」

「もちろん、これはこちらでも行っています。ですが、エイワスはアシユタロスと同等かそれ以上の高位神族であるために捕縛は困難です。既に天界と魔界との間で合同チームを作っていますが、そのチームも高位神族か魔族に潜伏先を伝えるためのつなぎに過ぎません。ですので、横島さんの調査がどうしても必用なんです。」

彼女は、今魔族や合同チームといったが、実際に神や悪魔と呼ばれる存在は各宗教で言われているような存在ではない。神族や魔族も実際にはヒエラルキーがあり、各宗教事に分化しているだけで全て同一の組織内に属しているし、枠組みも決められている。それに天界と魔界の間では、キリスト教徒が聞くと卒倒しかねないがデタントといって相互の友好も進められている。

「いやじゃ——、なんでアシユタロス以上に危険な奴と関われなきゃいかんのや——！絶対に転校なんかするか。」

横島は、人や妖怪など人でないものでも不条理に晒されているなら助けようとするが、基本的にヘタレだった。そんな奴だから危険な任務から逃れようとしたのだが、そうは問屋がおろさなかった。

「それは無理よ、だってもう転入し続けたから。」

そう言ったのは、美神令子。横島の上司で金にがねつく脱税さえ行う人物だ。その彼女の手には、転入手続きが掲げられていた。当然学園都市のものだ。

「小竜姫様からもう前金は振り込まれてるのよ。もう学園都市への転入続きは済ませたわ。覚悟するのね。」

「そんな〜」

こうして横島は学園都市へ転校することになったのだった。

GS美神×とある魔術の禁書目録

第六話 学園都市へ転校！！その2（後書き）

GSの世界なら神族や魔族が阻止に動いてもおかしくないかなという考えで転校させてみました。

第七話 とある少女と絶望の街

「超キモいです！これホラー映画を見るのは卒業ですね！」
そう叫ぶ少女がいた。その少女の名は、絹旗最愛。学園都市の非法工作を行う暗部に属し、様々な非法工作に携わっている。そんな彼女が叫ぶ原因は目の前にいた。それは普通人なら目を覆いたくなるようなもの、いや荒事には事欠かない彼女でさえ正視に耐えられないものだった。

それは、人間だった。いや正確には人間のなれの果てだった。姿形は普通に見えるが、実際は違っている。その瞳孔は虚ろだ。よく虚ろな瞳というが生きている限り瞳孔の反応で本当の意味で虚ろになりはしない。

そして手や肩などの全身の所々が崩れ、腸などの内臓さえ体の外へと出ていて致命傷どころか死んでいるはずだというのに動いているのが最大の違いといえた。腐臭さえ漂う彼らは、生きた死者——
——つまりはゾンビだった。

彼女は、ホラー映画が好きだが現実のゾンビを見てその考えは変わらざるをえなかった。実際の戦闘を経験している彼女からすればホラー映画は、所詮作り物に過ぎないが現実にはゾンビがいるなら別物だ。彼らは、群れを成して動き誰彼構わず見つけてしまつと生きたまま断末魔の叫びを上げる相手を生きたまま貪り食うのだ。集団で相手を無理やり押さえつけ、相手の体を皮膚を噛み千切り手で切り裂きそうやって体の表面を食い尽くしたら、次は内臓や骨さえも食い始める。

まるでアマゾンのピラニアのように。ゾンビが現れてからしばらくたつが、流石に彼女もそんな経験には耐えられなかった。

ゾンビが現れた原因は、不明だが恐らくはオカルトな事象ではなく生物学的なものだろう。人間の体を動かしているのは、細胞だ。おそらくは、完全に細胞の腐敗を抑えきれないものの死亡した人間の体を無理やり細胞を操ることで制御しているのではないだろうか？ 噛み付かれることで感染するのも接触感染というなら説明が付く。

彼女がいるのは、学園都市ではなくアメリカのラークンシティだ。確かここには、アンブレラという表向きはクリーンな多国籍企業だが、裏面では生物兵器開発さえ行っている悪魔の企業としての顔を持っている企業の支社があったはずだ。学園都市の求めている技術と方向性が違うためだろうが、そのバイオテクノロジー技術は学園都市以上の水準にも達しているといわれ、それ以外にも一部技術は学園都市にも匹敵するような水準を持っていると噂されている。おそらく実験が何かに失敗し、この惨状になっているのだろう。

この推測は当たっており、凶暴性を上昇され遺伝子を改変し作り変えるという機能を持ったT-ウィルスを利用しBOWバイオオーガニックウェポンという生物開発の実験を行っていたのだがそれがうまくいかずウィルスが漏洩してしまう事態になったのがこの事件の元凶だった。

ちなみに彼女がいるのは、潜伏と逃亡のためだった。原石という先天的な超能力者をアメリカは学園都市への対抗上集めていたのだが、原石が集まってしまうとそれは学園都市にとって超能力開発というアドバンテージを失ってしまういかなかった。そのためにアメリカの原石確保の中心になっている要人ジョージ・キングダム暗殺のために彼女はアメリカへと来たのだったが、暗殺には成功したものの逃走には執拗なアメリカ側からの追跡が行われ捉えられるということとはなかったものの失敗していた。再度逃走を図るためにラークンシティで潜伏を行っていた際に今回の事態に巻き込まれてしまった。

本来ならゾンビが闊歩し生者を食らいつくような惨状になる前まで

だいぶ間があり、当然彼女も脱出しようとしていた。だが、プロである彼女と違ってラクーンシティーのパニック状態に陥った市民によって舵手津を妨害され、そうこうしているうちに感染拡大を恐れたアメリカによって周囲は完全に封鎖され、重火器で武装したアメリカ軍の手によって囲まれ脱出不可能な事態へと追いやられているのだ。

それは、ともかく今は目の前の事態に対処しなければいけなかった。数体のゾンビの群れによって囲まれ、今すぐにも緩慢とした動作だがおいしい獲物とも思っている？ゾンビの群れに食べられようとしているのだから。

ゾンビが顔を伸ばし、彼女の体へ噛み付こうとした。だが、そのゾンビは噛み付くことが出来ず彼女と接触しただけで見えない壁によって弾かれたかのように弾かれ地面へ激突してしまった。

他のゾンビも同様に触れることが出来ず、弾かれたり怪力で持ち上げられたかのように地面へとただ投げ飛ばされていた。

そして動けなくなったゾンビの眉間へと目掛けて彼女は、少女の手にはにつかわしくない軍用大型拳銃コルトガバメントを素早く放った。ホラー映画と同様にこのゾンビも頭部への攻撃は有効だということゾンビを観察する中熟知していた。

そしてゾンビの群れは、沈黙した。今度こそ本当に死んだのだった。とはいえゾンビを倒したとはいえ問題が解決したわけではない。

ゾンビの群れが多い尽くす街にしていることには変わりはないのだった。彼女がゾンビを弾き飛ばしたのは、窒素装甲というレベル4の超能力であり、窒素を固形化しあやつることによって銃弾さえ防ぎ自動車さえ持ち上げられるという能力だ。

だが、それを除けば彼女は訓練を受けたとはいえ肉体はただの少女なのだ。学園都市のレベル5であるならともかくレベル4の彼女で

は、大量のゾンビの大群を圧倒するだけの破壊力はもてないし、超能力行使にしろ脳を使うために脳の情報処理の負荷や疲労によって働く度合いが変わってしまうのだ。

そのため超能力の行使にも限界はあった。

しかし、彼女は死ぬつもりは無かった。この町からの脱出手段を必ず見つけて非合法工作を行う部門とはいえ仲間の待つ学園都市へと戻るつもりだった。

今一人の少女の生き残りをかけた戦いが始まった。

バイオハザード×とある魔術の禁書目録

第八話 学園都市に君臨する神（前書き）

神といってもとある世界の神霊やGSの神族ではありません。有名なものです。

第八話 学園都市に君臨する神

学園都市。そこは、人口が230万人を数える都市で、科学技術力の格差が外部との数十年の差がある化学の最高点ともいえる都市だった。超能力という量子力学的な原理を自分だけの現実バーンチルリアリティーを利用することによって常識ではありえないような事象を生み出す能力者さえ科学の力で作り出すことさえ出来た。

だが、その都市を科学では説明の付かないまさにオカルトとしかしかいいようのない災厄が襲っていた。

学園都市では、超能力の開発を行っており、そのため高レベルの能力者になればなるほど優遇されそれがもたらす優越感から低レベルの能力者を見下し能力を利用した暴行行為といったものが頻発していた。

また、低ベルの能力者の中にも能力を利用した犯罪行為に走るものが複数存在していた。

そんな学園都市では、ここ数ヶ月犯罪行為は減少していた。それは、学園都市の警察機構であるアンチスキルや学生の精神性があがったわけではない。それは、死の恐怖で無理やり従えさせられているのだ。

学園都市外では、救世主とさえ一部の人間があがめカルト教団的な集団も出来ているキラと呼ばれる存在が犯罪を撲滅するために活動していた。犯罪を起こしたものに死という裁きを下すことによってそのキラの魔の手が学園都市内にも伸びてきたのだった。発端は犯罪を行った学生の心臓麻痺での死亡だったが、その後に同様に犯罪を行った学生が心臓麻痺を起こし次から次へと死亡していった。それは、キラの殺しの手口と同様の手段だった。

それがキラの殺しの手口なのだった。遠隔地から相手を心臓麻痺で殺すという呪いとか言いような手段。キラ事件を捜査している世界的名探偵しによると、顔と名前の分かっている相手を殺すという非現実的な手段なのだそうだが、物議をかもした死刑囚を利用して凶作戦で顔を晒していたしの代役を殺せたというのに顔を晒していないし本人を殺していないことを考えると信憑性はあるかもしれない。

とはいえそれでキラを逮捕できる訳ではない。そして今日もキラの裁きが下されていた。

学園都市内にある学生向けのマンション。そのマンションでは、一人の端正な顔立ちの少年が黙々と黒表紙のノートに何かを書き込んでいた。といっても勉強しているわけではない。

そのノートには名前を書いていた。名前を書かれている人物は、全て犯罪を犯したもののばかりだ。顔と名前を知っているものをノートに書く、それこそがキラの殺しの手段なのだった。

「よう月、この学園都市って所は面白いな。俺たち死神には効かないとはいえ超能力なんてものを利用した犯罪があるんだからな。」

キラである少年——夜神月——に話しかけているものが居た。話しかけているといっても実際には、誰もその姿を捉えることは出来ないし、声も聞こえないだろう。だが、それは幻覚でもないし幻聴でもない。名前を書き込むだけで相手を殺せるノート（デスノート）は、人間が作り出したものでなく死神という一種の霊的存在の使用するものだ。死神は、このノートに名前を書き込むことによってその対象の寿命を基にして相手を瞬時に殺せることが可能で相手の寿命を食らうことで半永久的に不死さえ実現していた。

その死神の持っているデスノートに触れることによって、死神の姿

を捉えることが始めて可能であり、ノートの本来的持ち主であるリユークが話しかけているのだ。そしてリユークは死神が半永久的な不死の存在であるがために社会的停滞している死神界に快楽を見出せず、デスノートを人間界へわざと落とした。デスノートを使つての大量殺人が行われても一向に構わなかった、それが彼にとって快楽になるのだから。

「死神だからかもしれないが、リユーク、面白いなんてものじゃないよ。超能力を利用した犯罪は、非常に脅威的で鎮圧するのが難しいんだ。それによつて罪のない人が犠牲になっている、一部の悪人の存在によつてね。もっともそれもこの新世界の神である（キラ）僕が現れた以上はすべて終わらせてもらおう。」

優越感さえ感じる口調で月は、リユークに返答した。犯罪者に裁きを下す救世主と自身も賛同者も言っているが、その実態は月こそもっとも悪なのかもしれない。

月自身は、元々は善良な正義感に溢れる少年で犯罪行為を憎み何とかしたいと純粹に思っていた。しかし、実際には凶悪犯罪者に対して精神異常で棄却されたりそれ以外にも様々な理由で犯罪者に対して法的制裁が下されていなかったという事実をハッキングによつて警視庁のデータから知ってしまった。それから彼は既存の社会体制では悪人を裁くことが出来ないことを痛感し、デスノートの効力を知つてからはそれで世界を変えられると考え犯罪者に対して裁きを次々と下していた。

だがそれでも月は悪に過ぎない。人を殺すことを悪というつもりはない。人の命は尊いというのは簡単だが、被害にあつた遺族などの関係者によつて野放しにされた凶悪犯罪者こそ憎いものはない。犯罪行為を行ったにも関わらず何の罪津も問われない相手を殺すという事で救われる人もいるのだ、そういつた人の思いを考えるとそ

れでも人の命を大事ということは出来はしない。それにキラによって犯罪の抑止効果があるのは事実だ。

問題はその精神性だった。月は、強力な権力を手に入れたことで醜く歪んだ人格の持ち主になった人物は幾人もいるが、月もそれらと同じ歪んだ人格の持ち主へとなっていた。デスノートを手に入れた当初は別かもしれないが、人の生き死にを左右できる力を持ったことに酔いしれ、自分自身を新世界の神と神とさえ自称するほどになっていた。

自分自身を絶対的な正義とし、自分を認めない人物こそが悪とさえ思うまでになっていた。事実、代役だったとはいえLを殺そうとしてFBI捜査官さえも殺している。

これでは、ただの恐怖支配を行っている独裁者と変わりのない独善的な存在にしか過ぎない。

「それにだ、リユークこの都市へ来たのは他にも理由があることを忘れていないかい。」

「ああ、あれか。やっぱり人間って面白いな、同属同士で殺しあうなんて俺たち死神の常識じゃ考えられないからな。まあせいぜい楽しませてもらうぜ。」

夜神月は、学園都市へ来たのは学園都市外で学園都市で犯罪を起こした学生の名前が分からないために情報取得のため学園都市へ転校してきたのだった。とはいえそれだけが理由ではない。

夜神月は、警視庁へ凶悪犯罪者のデータを盗み見るためにハッキングを行っているがその際に何の痕跡も残してはいない。これと同様に学園都市で漂っている黒い噂の真偽を確かめるためにハッキングを学園都市のコンピュータシステムへとかけ、技術力の差から苦戦したし短期間だけだったとはいえ侵入することに成功した。

その黒い噂は事実だった。学園都市では、ナチスドイツに勝るとも劣らない人体実験が統括理事会公認という形で行われていた。この人体実験に対してキラとして裁きを下すために来たのが学園都市へ来た目的だった。

「統括理事会のトップのアレイスター・クロウリーは名前はともかく顔は公開していないし、統括理事会を全員皆殺しにするだけじゃ関わった研究者は見逃してしまう。厄介だけどこの僕を敵にしたことを後悔させてやる。」

そう夜神月は、歪んだ正義とはいえ覚悟をひしひしと感じ取れることを言った。

学園都市へ神が君臨した。自らを絶対正義とする歪んだ神が。

DEATHNOTE×とある魔術の禁書目録

第八話 学園都市に君臨する神（後書き）

ちよつと長かったでしょうか。文章を短くまとめるのが苦手でした。

第九話 インデックスin魔界都市（前書き）

インデックスを学園都市でない物騒な都市に行かせて見ました。

第九話 インデックスin魔界都市

198X年9月13日午前3時、隆盛を続けていた東京都の新宿を恐らく史上最大の災厄が襲った。隣接する地区には何らかの意志が働いたかのように微震さえ感じさ無かったがマグニチュード8.5以上、震源地新宿駅地下5000M付近と思われる都市直下型地震^{デビルクエ}魔震によってその隆盛は崩壊を遂げてしまった。地震自体は3分程度しか起きていなかったがその間に耐震型のビルを含め多くの建築物が倒壊死者4500人を出してしまう惨事となった。通常地震なら火災など副次災害で使者が出るにも関わらずこのような事態が起こるのは前述した物と他の物とを合わせ魔震が通常の物理法則にのっとならないものであることを象徴付けている。

新宿に対して直ちに復興が行われたがその復興は、学園都市という超能力のような物理的に説明のつくものでない怪奇現象によって大量の犠牲者を出し、政府は新宿を放棄しこれ以来新宿は独自の外部からの介入を許さない人外の生物や人間でありながらありえないような戦闘能力を持つもの、超自然的な力を備えたものが闊歩し学園都市クラスかそれ以上の科学技術格差とこれらをあわせ独立行政区としての道を歩みだすことになるのだった。

人々はこれ以後の新宿をこう呼ぶ―魔界都市と。

夕方、そんな都市を一人の青年が家路へ急いでいた。その青年は本業はせんべい屋なのだが副業として人探し屋をやっており、その仕事を終えての帰りだった。新宿に住む住民は、犯罪が頻発しているために相当の戦闘能力を区民でも持っているものがいるがその住民にしるこの青年のような飄々とした態度を取ることはできないだろう。新宿には犯罪者だけでなく妖物や靈魂など人外の存在もあるし、それだけでなく怪奇現象の多発地帯であり気温は夏場だといふのに凍死するほどの極低温の環境に変貌したり神隠しのように唐

突に消え去ってしまうこともあるのだ。

そんな中を飄々とした態度で歩けるものはよっぽどの大馬鹿かあるいは人外の域にまで達した戦闘能力を有した化け物といえる人物であるかだ。その青年は後者に位置し、区外の人間や魔界都市の住民でさえ怖気を奮う事態でさえも魔界都市ならではのものと楽しめるだけの実力を有している。

そのためその青年―秋せつらは魔界都市で手を出してはならない三魔人と呼ばれ恐れられている。

せつらは、自分の家である秋せんべい店が見える所まで来たのだがそこで奇妙な物体を見つけてしまう。その奇妙な物体とは人だった。髪は銀髪でありかなり高価そうな刺繍を織り込んだ修道服を着ているところを見るとシスターと思われる14〜15歳の女の子だった。倒れたまま動かないが、この街ではのたれ死にや追いはぎなどは日常茶飯事でありいちいち気にしては入られない。問題なのは秋せんべい店の前で、倒れていることだった。

「家に入るのが邪魔だからどいてくれないかな。」

せつらの一声がそれだった。既にせつらの操るミクロン単位の武器としても情報を執するツールとしても使える錬金加工を施された妖系によって生存は確認されている。生存しているのなら助けようとするのが普通かもしれないが、ここは魔界都市だ。行き倒れなど対して珍しくもないしいくつか関わっている暇もない。それに区外にする身元不明の人間を助けるなど奇特な人間でもない限りまずいだろう。

「おなかが減ったんだよ。」

せつらの物言いも凄いが相手の物言いも凄い。行き倒れかけているとはいえず知らずの人間から食べ物を買おうというのなら少しはためらいがあってもおかしくないのにすぐ食べ物をくれといってき

ただ

。「ねえここお菓子屋か何かでしょ。何かくれたら嬉しいな。」

その少女は目を潤ませながら顔を合わせ懇願してくる。新宿の住民といえどもこれを見たら上をほだされる物がいるかもしれないし、あるいは人身売買や性欲処理のために犯すなどを理由に助けようとするふりをするものもあるかもしれない。

だが相手が悪かった。相手はせつらである。全く情がないというわけでもないのだが、かなり酷薄なところがある。そんな相手が情をほだされるだろうか？答えは否だ。

「お金を払ってくれるというならともかく、どうして見ず知らずの人間に無料で上げなきゃいけないんだ。とにかく邪魔だからどいてくれ。」

「このままじゃ行き倒れるかもしれないんだよ。私が死んじやつてもいいの。それに見捨ててるつもりなら死ぬ前に最後の力を振り絞ってこの家の方向とあなたの顔を書き記すんだよ。」

それなら児童虐待で逮捕されるかもしれないんだよ。」

少女はならばと脅迫じみた内容を含んだ言で食べ物を狙おうとする。だがそれも「別にこの街じゃ行き倒れ珍しくもないし僕には何の関係もない。それに警察にもうるさい奴がいるけどコネがあるし、虐待の跡があるかないかなんてプロならすぐに分かるさ。」とせつらにそれすらも否定されてしまう。

それを聞いた少女は、そのまま泣き出してしまった。このままだと本当に死んでしまうかもしれないのに食べ物を与えないと言われたのだ、発言の内容にも凄いとこがあるが拒絶されてしまったことと空腹を満たせないという思いから耐え切れずに泣き出してしまった。これにはせつらも閉口してしまった。

ここが魔界都市であるとはいえ小さい子供を泣かしてしまったというなら近所の目を気にしながらすごしてしまうことになる。そんな

のはごめんだった。

「わかったよ、負けだ。食べ物も上げるし、必要なら2、3日過して言うてもいい。」

「わーい、ありがとなんだよ。」

それを聞いた彼女は嘘泣きではないかと思われるほどの速度で泣き止んでしまった。それほどおながが減っていたのだろう。

（また厄介なことに巻き込まれるかな・・・）せつらはその少女と関わることを決めてしまったとはいえ内心ではかなり後悔していた。この少女の態度と少女の身につけている衣服からせつらはこの少女がただの少女ではないことに気づいていた。

秋せつらは、美貌といわれるが実際はその言葉では表しつくせない人外の美だ。せつらは自覚があまり無いが、それでも周囲から言われているのである程度の意識はある。よく美しい人間に惑わされるというが完全にその人間の美しさに囚われてしまい、冷静な判断力すらも失ってしまい集団でパニックになってしまうほどだ。戦闘を仕掛けてきた人殺しをなんとも思わない相手でさえもせつらを殺すことができないといい同士討ちさえ行ってしまったこともある。

この少女はその反応が無いのだ。この時点で普通ではないと気づくし、新宿の闇に生きるものとして少女の着ている衣服が相当の魔術的防御を施されていることは認識している。何らかの厄介ごとに巻き込まれるかもしれないというそのせつらの予感は見事的中してしまうことになる。

その少女ーインデックスは魔界都市に何をもたらすのだろうか？

第九話 インデックスin魔界都市（後書き）

とゆう訳でインデックスが魔界都市行きでせつらと関わることになりました。秋せつならステイルと神裂相手でも余裕で圧勝するかも。

第十話 それぞれの動き（前書き）

学園都市に君臨する神の続編です。キラを巡るキャラの動向を描いてます。

ま、結局たった一人の視点重視なんですけどね。

第十話 それぞれの動き

問題を抱えていたとはいえ平和だった学園都市。だが今の学園都市は違う。

キラによって確かに犯罪発生件数は減少したが、それは死の恐怖を感じているからで本当の平和ではない。そんな恐怖による恫喝を行っているキラだが、学園都市内にも無能力者を中心にキラ信仰が始まっていた。

だがそれに対抗するものがないわけではない。学園都市内にも対抗しようとする勇敢な人間はいるのだ。

学園都市内のある学園寮。その一室で一人の少年が何もせず立ち尽くしていた。ただ立ち尽くしているだけだが、その背中を見つめる同居人の少女もその背中から発せられる悲嘆から話しかけることはできなかった。

（何で死んじまったんだよ、御坂・・・）

その少年上条当麻が悲嘆に暮れていたのは御坂美琴の死だった。流石に死者に嫌っていた名を使う気はない。

死んだのではなく殺されたのだった、キラと名乗る存在によって。その日も御坂美琴は自分との勝負を行うということで電撃を轟かせ、それを自分が逃げるといつつも日常？が繰り返されていたが、その日常は崩壊した。俺を追ってる途中にいきなり苦悶の表情を浮かべ胸をかきむしりながら倒れてしまった。慌ててかけより介抱しようとしたがその時に既に体は冷たくなり、救急車を呼んでも意味がないと分かっていた。御坂は死んでしまったのだ。

死因は心臓麻痺によって起きていて健康な体だったことからキラによる犯行と思われた。キラが何が原因で殺したかは分からない、俺

が御坂に追いかけていたことが原因なのかもしれない。

それでも御坂は悪いやつじゃなかった。

絶対能力進化実験なんていう歪んだ実験に立ち向かう勇氣や思いやりだって備えていた。そんなやつをキラは正義の名の元に殺したのだ。

ふざけるなといってやりたくなる。

生きていた時はそれなりに嫌なやつとも思っていたが、こんな風に思うのは死者への感傷なのかもしれないし御坂の近親者 - 妹や友人、両親 - の悲しみを見たことから来ているのかもしれない。

それでも俺はキラを許さない。御坂だけじゃない、御坂以外にも殺された奴は大勢いるのだ。

ただ正義の名を振りかざして殺された人間のことを何とも思っていない独善的な人間だ。

そんなやつを許してはおけない、その幻想をぶちこわしてやる！！

この日一人の少年が居候の少女の知識をかりながらもキラに立ち向かうことを敢然と決意した。

それだけではない、アンチスキルの女性やジャッジメントで御坂の友人、とある組織のスパイ、そして学園都市での捜査権を得たキラ対策本部も動き始めていた。

キラの幻想もうち破られるかもしれない。

DEATH NOTE × とある魔術の禁書目録

第十一話 とある聖人と名探偵（前書き）

意外な作品とのクロスです。イギリスに旅行に行っていたので。

第十一話 とある聖人と名探偵

イギリスのリージェントパーク、休日であるためそこは家族連れや観光客、子供たちで賑わっていた。太陽はさんと降り注ぎ、広大な敷地のほとんどを占める自然公園の下草を子供がはしゃいで通り、池にはサギが泳いでいる。

それ以外にも隣接する動物園やスポーツ施設で人々は恋人とデートしたりスポーツを楽しむなど平和でのどかな光景が広がっていた。

そんな光景の中ベンチに腰掛け彼女は居た。腰まで届く黒髪をポニテールにし、格好は着古したジーンズに白い半袖のＴシャツでジーンズは何故か左足の方だけ太股の根元からばつさり斬られ、Ｔシャツは脇腹の方で余分な布を縛ってへそが見えるようにした極めて現代的な日本文化を体現した服装をしている。足にはブーツをはいている。

世界都市であるロンドンだがそんな見慣れない奇抜な格好に注視する人は多い、いや男性なら奇抜な格好よりも巨乳であるなど魅力的な肢体の持ち主だからかもしれないが。

こんな格好をしているが一応彼女は修道女であり神裂火識^{ネセサリウス}というが所属している部署はイギリス清教の必要悪の教会^{ネセサリウス}という物騒極まりないところである。

ロンドンには名高い新宿とも並ぶ魔界都市であり、かつての隆盛からすれば衰えているが神秘的な力は未だに多い。近代的な都市とは裏腹にその裏にはダミー^{ネセサリウス}会社という形で魔術師達のカルト結社が数多くあり、必要悪の教会はそんな魔術師を律する戦闘機関で彼女も残酷極まりない部署の人間なのだ。

そんな彼女がこの場所にいるのは護衛のためだった。残酷極まりな

い部署にいたといったが彼女とて人間だ。自分にとって何よりもかけがえのない一人の少女を組織の仕事とはいえ守るために来ているのだ。

その少女のためなら命だつて投げ出すし、彼女を支えてやりたいと思っている。その思いを利用されるほどに。

そしてその少女―銀髪が生えるインデックスは「大変なんだよ、神裂。」とこちらに彼女よりも幼い男の子を連れてこちらに駆けていた。

インデックスの笑顔を見るたびに神裂の胸は心臓が止まりそうなほどになる。一年後ごとに記憶を消さないと組織の完全記憶能力という体質を利用した命令によって脳への負荷から死亡してしまう状態から追い込まれたのだ。組織の命令の意義や必要性は理解しているし憎むつもりもないが、大切な思い出を失わせる度に自分のことを思い出せない彼女をみると辛くなる。

そんな思いを露知らず活発な彼女はこちらにやってきた。

「神裂、大変なんだよ。この子が変わなおじさんから手紙を貰ってその手紙を解かないと爆発するって言われたんだよ。」

「あのインデックス、どういうことなのかよく説明してくれませんか？できればそちらの子から。」

神裂に促されてその少年は喋り出した。

帽子を深く被って顔を隠したおじさんと出会ったこと、そのおじさんに爆弾をロンドンの何処かに仕掛けたと言われたこと、手紙を渡されその暗号を解かないと爆弾の隠し場所は分からないことを言われたこと、その時にインデックスと出会ったことなどを話した。

それを聞いた神裂は、「おそろくいたずらでしょう。」といった。

「これが犯罪を行うなら一々予告を出さないでしょうし、予告を出すにしろ大規模なテロや愉快犯ならテレビなどをつかいます。ですのでよくできたイタズラでしょう。」

彼女は一応プロだ。そのプロの経験からしてイタズラだと告げていた。

「でももし本当だったらくさんの人が死ぬことになっちゃうんだよね。」

「そうだよ、神裂。私からもお願い、何とかして。」

その少年とインデックスは純粹な善意から神裂に助けを求めてきている。特にイタズラとはいえインデックスの存在は大きかった。

「分かりました、インデックス。とりあえずスコットランドヤードに知らせましょう。その上でシェリーにも話しておきます。暗号解読はあの子が得意ですからね。さあ行きましょう。」

その少年と喜んでいるインデックスを連れ彼女はスコットランドヤードに通報し、さらに必要悪の教会にもピクルスやボイルドエッグなど意味不明な暗号の解読をシェリー・クロムウェルに依頼していた。

彼女はまだこれが大事件の始まりだとは知らない。

第十一話 とある聖人と名探偵（後書き）

クロス元の作品のキャラは次出てきます。

第一二話 とある聖人と名探偵その2

翌朝のイギリス清教必要悪の教会。ネセサリウスその一室で「何ですって」と叫ぶ声が響き渡っていた。声を出しているのはいわずと知れた神裂火織で原因は目の前に座っているシェリー・クロムウェルだ。金髪でゴスロリという神裂以上に奇抜な格好をしている。

「大声だすなよ、これが本物だつて情報がスコットランドヤードから入った。」

主犯は、ハ・デス・サドラ・って男だ。

話題となっているのは、あの暗号のことだった。当初はいたずらと考えていたのだが、スコットランドヤードに大量の通報が入り、指紋を採取したところハ・デス・サドラ・という爆弾魔だということがわかった。以前にも暗号を送ってきた男で目的は母親の死への復讐だ。

「ま、魔術絡みなんじゃないんだからうちが動くことはないだろ。」
シェリーは冷たく言う。イギリス清教の必要悪の教会はネセサリウス対魔術部門なので動く必要はないのだ。

何人死のうが魔術絡みでないなら問題はない。ないのだが、「確かにそうかもしれないませんが私はあの子の悲しむ顔を見たくない。このハ・デスという男も爆弾も見つけて見せます。」と言いながら神裂はシェリーの制止も聞かず部屋を飛び出していた。

流石は聖人、まるで嵐のようにすれ違った人物を突飛ばし次の瞬間にはロンドン市内にいた。

そしてそのままロンドン市内のさまざまな場所を探したのだが、ハ・デスという男の顔も爆弾もどこにあるのか分からなければ意味がないと冷静になると気づいた。どうしようかとビッグベンを視野に納める橋の上で思案しているとケ・タイが鳴り出した。

機械音痴なため恐る恐る出てみるとかけてきたのはシェリーだった。
「全くいきなり考えなしに飛び出すよな。まあそれより暗号が分かったよ。」

「早く教えてください。」

「そうせつつくな、この暗号は全てとけたわけじゃないが恐らく建物を文に置き換えているんだ。」

時計塔は、ビックベンだ。」

「ビッグベンですか、それならすぐ近くにいますので向かいます。何か分かったら連絡を。」

ケ・タイを切るとビッグベンに向かって彼女は歩みだしたのだが、それを止めて二人の日本人親子を見た。

中年の男性と高校生くらいの娘で橋の欄干で何かやっている。会話には暗号と出ているので何か関係あるかもしれないと彼女は話しかけてみた。

「あのすみません、ひよってしてあなたがたも暗号を？」

「はい、そうです。私毛利蘭っていいいます。」

アポロ君って男の子のためにやってるんです。」

「おお、美しいお嬢さんだ。この日本の名探偵毛利小五郎にお任せ下さい。」

人通り自己紹介を終えるところこの暗号は建物を示しており、シャ・ロツク・ホームズの台詞と関係のある暗号を解かないといけないらしい。

既にそれ以前の暗号を解いているため彼女は同行を決めた。

そして彼女は出会うのだった、体は子供、頭脳は大人の名探偵に。

「ねえ、お姉さん。お姉さんって何者、隠してるけど体裁きが普通の人じゃないよ。」

「（見抜かれたー！）私を見抜くとはそういうあなたは一体・・・」

「江戸川コナン、探偵さ。」
とある魔術の禁書目録×名探偵コナン

第十三話 御坂美琴の堕ちる時（前書き）

久々の更新です。

第十三話 御坂美琴の堕ちる時

深夜の学園都市内。表向きは製薬会社の研究機関となっているそこは騒然とした騒ぎが起きていた。

研究員が走り回り、研究棟で発生した火災を必死に食い止めようと警備員らしき人間が走り回っている。

大火という訳でもないがボヤでもない火災だというのに誰も警備員アンチスキルを呼ぼうとはしない。

「やれやれ、彼女にも困ったものだよ。学園都市の支援を受ける我々に叶うはずがないというのに。」

「まあ精々走らせておけばいいでしょう。」

取り交わされる研究員の会話も常の者とは違う。実はここは巨大な人体実験機関なのである。

そしてその研究所の近くには一人の少女が絶望や怒り、そして諦観が入り交じった面持ちでその研究施設から離れていた。年は中学生くらいで帽子やジーンズと合わせて胸が小さい……とにかく男の子のように見えるが実際は少女だ。

研究所を遠隔地から自身の能力超電磁砲（レールガン）で襲った彼女の名は御坂美琴。学園都市最高の超能力者の一角である。

だが今彼女はそれを誇る心境ではなかった。

（何がレベル5よ。軍隊と戦えるなんていつて大切な者を守れないなんて。）

ただひたすら自責の念に駆られていた。

実は彼女のクロンを使った人体実験なのだ。

それをひょんなことから知った彼女は阻止に動いたが、クロン生産施設を対策として拡大されたことで彼女自身の能力を持つてしても解決は不可能だった。敵は組織なのだから。

実験でクロ－ンとはいえ命のある存在を奪われなすべもなかった。そしてそんな彼女に手をさしのべるものがいた。

「やあ君が御坂美琴だね。君が困ってるなら助けてあげようか。」
そう彼女に後ろから唐突に声がかけられた。

振り向くとそこには銀髪でオカツパ頭の何故か学生服を着た20～30代くらいの男性が月光を背景に浮かんでいた。

これは本来ありえない出会い・・・

超能力犯罪史上最悪と称される兵部京介との出会いは何をもたらすのだろうか・・・

第十三話 御坂美琴の堕ちる時（後書き）

続きは一応書こうとおもいます。

第一四話 御坂美琴の堕ちるとき2

「誰！」

そう叫びながら美琴は反射的にその男にめがけて電撃を放った。それは、致死レベルでこそないがそれでも相手を気絶させるには十分なのだが……

電撃が多いかかる直前に、その男の姿は忽然と掻き消えた。消えると同時に「やれやれ、いきなり電撃を放つとは酷いなあ。」と目の前に平然と立っていた。

（テレポート（空間移動）、いや同じでもテレポート（瞬間移動）の方が……）

目の前に忽然と現れても彼女に怯む様子はない。何故なら超能力を科学で説明した都市には、別位相を介することで遠隔地へ移動する能力さえあるからだ。とはいえ目の前の男が行使したのはそれではないだろう。

学園都市のテレポート（空間移動）の欠点は複雑な演算が必要なことであり、移動範囲なども限られてしまう。あの一瞬で光速の電撃を避けるには外能力でないと不可能だ。

超能力が存在するのは学園都市ではなくむしろ超能力の発言で言うなら外が早い。何故なら超能力開発というプロセスを経ずに原石とも違う超能力者が遺伝子変異によって誕生しているからだ。

その歴史は古く、おそらく神話や民間伝承さえも一部は彼らがベースになっているのだろう。実用性で言うなら外能力が同じ移動能力とした場合は成熟している。

「外の超能力者のテロ集団の人間ね、あなた。」

「おやおや、流石は学園都市のLV5といったところか。あの一瞬で僕の正体を見破るとはね。」

その通り、僕は超能力者の解放組織PANDRAのリーダー・兵部京介だ。」

そう大胆不敵にその男は高らかに美琴へと告げる。

「リ・ダ・ほどの人間が何のよう？リ・ダ・が来るなんてよっぼど暇な組織なのね。」

この男が何の目的で接近してきたのかはある程度タイミングからみても予想はできる。とはいえこの男の目的や思想性を理解しなければ仮にあの子達を助けるのだとしても手伝ってもらうわけにはいかないのだ……

「単刀直入に言おう、僕の目的は君のクロ・ンの救済と君御坂美琴が僕の組織に加入してもらうことだ。」

それを聞いた美琴は耳を疑った。自分の加入を持ちかけてきたのだ。学園都市の能力者は基本的に非超能力者を見下すことはあっても排斥しようとする考えはない。美琴にしろそれは今でも同じだ。

「あの子達を助けるのに協力してくれるのはありがたいわ。でもテロ集団に私が関わるとでも！」

「いずれここが学園都市だったとしても超能力者と普通人との争いは押し寄せてくるよ、確実にね。ここではともかく外に出たら君も化け物あつかいされる……」

「確かにその可能性はあるわね。でも私は大量殺人に荷担する気はないわ。」

「確かに僕のやっていることは大量殺人なのかもしれないな。一方的な理想を盾にしているだけで実際は僕が助けたあいつらも利用価値があると思ってるだけなのかもしれない。」

「けどそれでも経験者として言わせてもらうが、普通人との共存は不可能だ。」

「所詮自分達に都合のいいように扱われるだけだ。」

その言葉はただのテロリストの言葉とは違っていた。その言葉は切実な思いや悲しみ、それ以外にも様々な思いが含まれていた。

間違っではいるかもしれないし、歪んでいるかもしれないが超能力者のことを考えているということはひしひしと伝わってきた。

「加入するかしなくても君のクロ・ンは助けるつもりだけど、でき

るならこれを見て決めてほしい。」

そう言いながら兵部は彼女に向けてテレパスを放つ。おそらく念波ならば電磁波で精神干渉の効かない彼女にも伝わるだろう。

（何よこれ・・・）

目の前に広がっているのは美琴のいた路地ではない。おそらくテレパスで視覚イメージを送ってきているのだろう。

美琴の目の前に広がっているのは陰惨な人体実験の全容だった。

学園都市がクロン実験に関わっていることから他にも人体実験は予想していたが想像以上だ。

死亡したように見せかけた高レベルや稀少性の高い能力者を奴隷のように扱う、自分達にとって都合のいい子供を養育し 平然と失敗すると分かっている実験を行わせる、脳の移植や薬物投与 e t c .

美琴の想像よりも学園都市の闇は遥かに深いようだ。突然ブラックアウトするかのように目の前に路地の光景が映ってきた。

「今のは僕の偽情報でなくサイコメトリングで撮った本物だ。仲間が衛星の無効化とか侵入は大変だったよ。」

兵部の声を聞きながら美琴は考えていた。

（こんなやつらがいるせいで、あの子達だけじゃない、何の罪もない子達が死んでいくなんて・・・）

その事実美琴の心を打ちのめし、彼女の中に今まで持っていたものよりも大きい闇が広がり彼女の心を覆っていた。

「さあ返答は？僕としては君の意思を尊重するけれど。」

「決めたわ、あなたの組織に入らせて。」

裏面であんなことをするやつらをのさばらせてはおけない！！」

「ようこそ、PANDRAへ！！学園都市に介入するのは政治的なものもあるから後になると思うけど君のクロンは必ず助け出させてもらうよ。」

学園都市内のLV5の一角御坂美琴はこれ以降行方不明になったが、それは何故か大々的に取り上げられなかった。

それと同時期に謎の複数の能力者の組織によってクロ・ン施設が襲撃され、その中に電撃を操る少女もいたがそれが彼女かどうか定かではない。

第一五話 とある組織の戦争介入

ロシアと学園都市の間で巻き起こった第三次世界大戦は、これまでの軍事上の常識をことごとく打ち破り学園都市側が勝利していた。核ミサイルはすべて撃墜され、機甲部隊は駆動鎧バードスーツによって撃破されていた。

そして日本海上空では、ロシア空軍と学園都市側の戦闘機部隊が熾烈なドッグファイトを行っていた。だがこれも結果は学園都市側の圧勝でロシア側は惨敗を切っていた。

ロシア側のSui27（スホイ、フ兰卡ーとNATOではいう）は、非常に優秀な戦闘機ではあるが想法の技術格差は歴然としている。まさに空に浮かぶクジラとでも言うべき巨大な外見を学園都市製のHsfi00はしているがその巨体に似合わない驚くべき機動性で全て自機に向けて放たれたミサイルやバルカン砲を回避し、有線型のレーザー兵器ユニットによつてSui27を空へ爆炎を起こさせながら次から次へと落としていった。

国を守る、この戦争に確かに不可解な理由があつたとはいえそのために出動したロシア側のパイロットたちは技術格差があるとはいえ自分たちが全くの無力であつたという屈辱感を噛み締めるしかなかった。

（さて、そろそろ降伏勧告をだすとするか。）

そうこのHsfi00の編隊を駆る亀山が思い立ったとき、それは起こった。一刀の緑に輝く閃光が空から舞い降り、眼前のHsfi00が撃墜されたのは。緑の専攻といったがおそらくレーザー兵器かでなければ高エネルギー粒子の塊かもしれないかった。

そのあとから現れたのは、戦闘機ではなかった。hHsfi00のほうはまだ納得がいくほど空では異質な存在だった。

それは人だった、いや正確には人型ロボットだった。地球の重力下では人型の物体が飛行したり歩いたりするのはありえないというのにそれは確かに何らかの光を周囲に放出しながら、空を飛行していた。

「学園都市並びにロシア空軍機に告げる。直ちに戦闘を中止し、この空域から撤退せよ。」

それがそのロボットを駆るおそらくまだ10代ではないかと思われるほどの若い声をしたパイロットが送ってきた通信だった。当然亀山もロシア側も国籍不明の訳の分からない勢力相手に了承するはずなかった。

「学園都市並びにロシア空軍機の撤退勧告の無視を確認。了解、刹那・F・セイエイ攻撃を開始する。」

その頃、ロシアの学園都市とロシア陸軍との戦場にも、それ以外にも世界各地のほとんどの紛争地帯にそれと同様のロボットが現れ同様のことを勧告していた。

今世界はさらなる動乱を迎えようとしていた。

「我々ソレスタル・ビーイングはあらゆる思想・経済的な利益・人種差別そのほか以下な理由があっても戦争行為を容認しません。戦争行為を行おうという意味が確認されたら我々ソレスタル・ビーイングは武力行使を持ってこれを排除します。」

全世界へと流れるソレスタル・ビーイングの演説。

「馬鹿な、駆動鎧もH s f 100も全滅だと。学園都市の最新技術が。」

崩れる学園都市の優位性。

「フ、ソレスタル・ビーイングか。計算外だが面白い。」

胎動するアレイスター・クロウリー。

「ソレスタル・ビーイングのロボット兵器を確保しろ。それさえ手に入れば学園都市より優位に立てる。」

ソレスタル・ビーイングの技術を求める各国。

「何が平和だ、人殺し共が。」

巻き上がる復讐の炎

「魔術とはなんなのか知らないが、お前は間違っているフィアンマ。」

ベツヘレムの星と対峙するガンダムマイスター達。

とある魔術の禁書目録×機動戦士ガンダムOO

IF 上条さんちの新年（前書き）

今年初になる小説を投稿。

内容は新年初とか言ってますが、どこかで見た内容なのはご容赦を。

IF 上条さんちの新年

上条当麻は、この一年危機的な状況を幾多も乗り越えてきた。死にかけたことも一度や二度では追いつきはしない。暴走した学園都市の狂気のクローン実験や魔術師に付け狙われていた暴飲暴食の修道^{シス}女の少女^{タイ}を助けるなど思い返したくもない思い出だった。

もう二度とあんな化け物じみた人間とは関わりたくないのに、持ち前の不幸体質のせいか事件に巻き込まれ、一度などは巨大な空中要塞の崩落に巻き込まれなんとか命からがら助かったことさえある。

命あつての元種というが、そのたびに怪我をして入院費を取られるわ高校を退学されるわなど命だけでなく日常を行う上で大変なのだ。

そして記念すべき20121月1にちの正月を迎えたときも彼は危機を迎えていた。

その日、奮発して作ったおせち料理を食べていたとき、「とうま、お年玉頂戴。」と言う声が幻聴ではなく聞こえてきた。

そう言ってきたのは、発育こそまだまだではあるものの透き通る銀^{シルバー}髪^{フロンド}の髪を持つ美しいというよりも可愛い系のイギリス人少女のインデックスだった。

「インデックス、上条さんは悲しいよ、どこでそんないかがわしい言葉覚えてきたんだい。」

「短髪が言ってたんだよ、新年になると日本はお年玉を子供がもらえるって。なんなのお年玉って。」

きつといい物なんだよね。」

「本当に欲しいのか、インデックス。インデックス、お前にそれだけの覚悟はあるか。」

「はは、何悲壮そうな声出しているんだよ。お年玉ってそんなに大したものなの、とうま。」

あっけらかんとした声でインデックスは言ってくるが、その目の前で異変が起きた。

「ブエエオ、ウゲエエ!!」

なんと今まで新聞を読みながらご飯を食べるというオヤジスタイルをとっていた上条がいきなり生暖かい鮮血を吹き出しながら、椅子から転げ落ちたのだった。

「とうま、とうま!!大丈夫!!誰か救急車あ!!」

倒れた当麻の近くにインデックスが寄ると、「い、インデックス・・あれを見る・・・」とまさに息もだえだえといった弱々しい声で力なく指さす。

その先には、赤黒い血液を修飾するようにそれと反する白銀の球が落ちていた。

「インデックス、それが・・・俺のお年玉だ。」

「とうま、これってなんなの。一体お年玉ってなんの玉。ひょっとして私当麻の何か大切な玉を奪ったんじゃない。」

「いいんだよ、インデックス。子供はお年玉をもらえるものなんだ。俺たち年上を犠牲にしてな、だが払わなきゃいけないんだよ俺たちは。」

お前と出会ってからもうちよつとで一年経つけどいつかこんな日がくること、上条さんは知ってたよ。

お前が幸せならいいんだ、俺はまもなく力尽きるがお年玉はひとつじゃない。世界中の親戚から七つのお年玉を集めるとなんでも子供^{キッズ}の願いの叶うお年玉^{トレジャーボール}になる。

それを集めるんだ、さようならインデックス。」

そう言いながら上条は永遠の眠りに……つかなかった。

（シメシメ、これでインデックスもお年玉を諦めるだろ。我ながら名演技だぜ。）

これは、全て上条の自作自演のインデックスにお年玉払わない作戦だった。あとはインデックスが騙され死ぬほどじゃなかったと言える。完璧なのだが……

「ふざけるんじゃないんだよ、とうま！！私の噛み付きを喰らいなさい！！」

さっきまでのしおらしい態度を捨ていきなりインデックスは、無防備な上条へ噛み付いた。その食に対する貪欲な欲求を満たすことのできる歯は、まるで肉食獣だ。当然そんな歯に噛み付かれたら……

「ぎゃああ、痛い、痛い！やめてくるインデックス！頼むから！！」

さすがのインデックスもその声に同情を覚えたのか、齒を上条の体からゆつくりと放した。

「分かったんだよ、その私を騙そうとした罪を許してあげます。白玉は別として撮影用の血糊をどこで手に入れたんだよ。」

「ああ、当然実写版の映画とある魔術の禁書目録公開記念に買ってみたんだ。それはともかくお前お年玉がなんなのか知ってるじゃないか。騙してもらおうとしたな。」

「（実写版じゃなくてアニメ版なんだけど、言わないでおこう）そっちだってお年玉払いたくないから騙してきた。十字教の修道女たる私にそんなことをすると神は地獄へ落とすかもね。お年玉頂戴。」

「ダメだ、我が家の家計は火の車なの。絶対にお年玉なんてあげません。」

「ぬう、おせち料理をそれなりに高い材料なのに買ったりするからだよ。」

「なんだと、元はといえばお前がおせち料理食べたいとか、それ以外にもクリスマスにクリスマスケーキの大きいのか大晦日に年越しそばとか食べたいっていったもの原因だろ。それ以外にもアイス食べたいとか一年間わがままいいやがって。今年はお前を甘やかさないって決めたんだ。」

「そんなに困ってるんなら私にも言えばよかったんだよ。そうしたら私のがまんしました。」

「お前に出来る訳がないだろ。」

「失礼なこと言わないでよ、まるで食欲の塊みたいじゃない。」

「何を言っている、お前は修道女よりも食欲の塊が似合うだろ。それで太らないのが不思議なくらいにな。」

それを聞いたインデックスは普段なら烈火の如く怒り出してくるのだが、怒り出してはこなかった。顔を縮め、顔を上条と合わせないようにしている。

そしてフローリングの床を伝うものがあつた。涙だつた。インデックスも上条の言葉に傷つき、それを見られたくないからこっそり泣いているのだつた。

それを見た上条は、「悪かつたな、インデックス。俺も言いすぎだつたよ。」と素直に反省し謝罪した。

それにインデックスも涙ぐみながら「私も悪かつたんだよ、とうま。私もこれからは家計のことを考えてあまりわがまま言わないようにするからと言ってきた。」

だが、この後インデックスが言ったのはその場の雰囲気ை台無しするには、十分なものだつた。

「だから、この後いい子にするからお年玉頂戴。お年玉くれたらいい子にするから。」

「ふざけるな、インデックス!!やるわけないだろ!!」

そしてそのあと上条とインデックスの二人は、口論を続け二人が落ち着くまで近所に騒音をまき散らすのだった。

第16話 来襲せし女神

眼下には、まるで未来にでも来たようなと思わせる超高層建築の群れが広まっていた。その間を様々な学生と思われる制服を着た男や背広を着たサラリーマン風の男、おしゃれなスーツ姿の女性といった出で立ちの人々が通り過ぎていき、中々に賑わっている。

どうやら学生だけでなくこの都市に居住している関連施設や企業の人間が多いようだった。

そんな雑踏の中を私は、通り過ぎていく。私は、警視庁刑事部参事官付けの泉田純一。階級は警部補。

推理ドラマの中では良く警部補といった階級が出てくるが、キャリア組でも無い限りはそんな階級にはおいそれとなれるものではなく、実際そんな階級に早くから付いているのはエリート組と言えるだろう。

私はノンキャリアで30才なので、昇進は早いことになる。その上警視庁刑事部の参事官付となれば私は順風満帆のエリートコース、出世コースに乗っていると勘違いする人も多いだろう。

だが、実際はそんなことはない。私の待遇をよく知っているものならば飼い殺し同然の扱いだということは分かっている。

私が飼い殺しというハメに陥っているのは、私の目の前を抱け高に歩いている私の上司が原因だった。

上司は基本的に男社会である警察のなかで珍しい女性で、万人が万人と認める絶世の美女だった。栗色のふんわりした髪とまるで最高の陶芸家の芸術作品かと抱いてしまう顔貌の組み合わせは絶妙だ。もちろん髪や顔貌だけでなく、スーツに収められた体もグラマラスで本人はその足や胸といった体を自慢にしており、他人に見せるものだと公言している。

女性の上司に不満を感じる男性もいるかもしれないが、こんな美女

と組めるのならいいのではないかと思う男性も多いだろう。

が、それは幻想に過ぎない。彼女の実態をすれば誰もが近づきになるどころかむしろ遠ざかりたいだろう。

私もできればそうしたいが、そうは上層部の判断のせいではないのだ。

「全くなんで私が学園都市に長期出張なんてしなければならぬのよ。ああやだ、上層部のせいだ。」

私の上司が私に向けていつてくるが、それは愚痴としてもとにかく上層部批判ともつながりかねないことだ。警察のような組織では、ちょっとしたことが出世を妨げることになるが彼女はそれより辛辣な発言をいつもし、場合によっては暴力的なものさえ振るうこともある。

それでよくクビにならないものだと思う人もいるかもしれないが、彼女はクビにしたいくてもできないのだ。

私の上司である彼女―薬師寺涼子は、27才でキャリア組。東大を浪人することなく受験に受かり、東大の法学部を卒業、警察のキャリア組への道と入れる国家公務員Ⅰ種試験やそれ以外の中央省庁でやはりキャリアコースとなるテストを見事受かっている才媛だ。

最も彼女が才媛であるからクビにならないのではない。彼女の背後にある力が問題なのだ。

彼女の祖父がもとと始め、現在でも警察方面に相当の影響力を持つ元警察官僚の父親が経営するJACESという企業が彼女の実家だ。

JACESは、正確には大日本警備保障といい警備会社としては日本最大のものであるがそれだけでなくホームセキュリティや金融分野にも参入する一大企業へと成長し、警察官僚の天下り先になっている。

警察官僚に影響力を持つ父親や天下り先の確保からしたくてもできないのだ。それ以外にも警察の上層部の弱みを握っているという噂

もあり、幹部は戦々恐々としている。

彼女をおとなしくさせるため仕方がなくある程度の部下を与えた上で、実務をキャリアが行うことはないというのに実際に犯罪捜査活動の前線に送っているという相手であるため、階級は階級でも出世できないのだ。

「上層部からの命令ですので仕方がないでしょう。それに超能力犯罪に対抗するための競技は重要ですし。」

「上層部に旨みがないからおしつけられたんじゃないの。超能力犯罪は問題だけど、それに下手に手を拾うと自分の出世に差し障る。だからおしつけてきたのよ。そもそも学園都市の教育制度のせいであんなことが起きるんじゃない。」

たしかに彼女の言うとおりだ。上層部に辛辣な意見を言おうとも彼女も公的な身分として自分よりも階級的に上に立つ相手からの命令であるため仕方がなく来ているのだ。自分たちにとって使い捨てにしやすい相手でもあるために。

さつきから学園都市や超能力とでてきているが、学園都市は日本の東京都西部の開発の進んでいない地域を開発し、千葉など周辺の3都道府県に跨がう巨大都市だ。

発案者はイギリスに国籍を持つアレイスター・クロウリーという物理学や脳科学それ以外にもいくつかの学位を持っている科学者が日本政府に持ちかけ、数十年前に作り出されたものだ。

単純な科学技術の振興を目的とした都市ではなく、アレイスター・クロウリーが発見し世界を賑わせた超能力という特殊能力の大規模実験施設として大学もある全寮制の科学研究機関が真の目的になる。超能力というと眉唾物に聞こえるかもしれないが、それは私と涼子が今まで体験したようなオカルトなものではなく純粋な物理学的な説明が既に実証されている。

人間の脳に手を加えることによって量子力学で言うシュレディンガ

ーの猫というあらゆる可能性が理論上無数に存在しそのなかにある手のひらから炎を発生させるといった可能性を発言させるのが超能力で、パーソナルリアルティーという個人の深層心理によるもので能力が発現するらしい。

たとえ低レベルの能力であれ物体を重力に干渉することで浮かすなどそれらは技術的なブレイクスルーを生み出す可能性があった。しかし、イギリスなどの欧米諸国では十字教といった宗教の影響や宗教サイドからの圧力によって能力テストを行えずそれらの影響の低い日本に持ちかけてきたのだ。

安全性への問題はほとんどなく、日本が技術進歩をより行えるということから日本政府も飛びつき発足された。何より持ちかけられた当時はバブル景気がはじめていたために、経済振興政策としても公共事業を発注する必要があったのだ。

しかしその特殊能力が今問題になってきている。学園都市は全寮制の大学まである都市で超能力研究のために強力な能力を発言した超能力者（学園都市では能力者と総合していい、超能力者は最高位クラスのレベルに与える称号らしいが）を優遇するという制度が取られている。

この制度で優遇されていた人間が卒業という形で学園都市外で生活を行うわけになったのだが、その後全てが全てというわけではないが、就職するなどして普段優遇されていたのに扱いが途端に酷くなるといった待遇への不満から犯罪に走ることもあるのだ。

それもレベルが低いものならともかく高レベルの能力者は、人体などまっぴたつに破壊するし、精神干渉系統の能力者で無理やり本人の意思でない行動をとらされたりなど犯罪の鎮圧や摘発が難しく、なかにはテロ組織化する動きもあり警視庁として学園都市で犯罪鎮圧にあたっているアンチスキルに協議することになった。

そのために私と涼子が来たのだが、これは警察幹部の責任逃れのためという面もある。超能力という犯罪に対処する必要があるが、超

能力反正への対処で失敗してしまえば自分が退任するという事態になりかねない。

結局は責任逃れのためなのだ。

そもそも当初の責任を言うなら学園都市側にあると言えるだろう。超能力を持つことで自分が偉いといった幼稚な思考を植え付けているのだから。

しかし学園都市に強く言いたくても政府として抗議することはできない。なぜなら学園都市は、もはや日本の都市ではなく実質独立した都市国家という胡散臭いものになっているからだ。

政治音痴の一般人はそんな認識はないが、どう考えても異常な事態なのだ。

学園都市はじめは技術開発の特許という情報を公開する形で経済力をつけていた。ここまではなんの問題もなかった。

しかし日本政府よりも経済力を身につけるようになるとその技術を公開することなく独占し、あまつさえ日本政府さえ人体実験であるため政府機関の監査が行われていたというのにその政府監査さえシヤットアウトし、壁で通行を遮るようになってしまった。

政府としてもなんとかしたかったようだが、学園都市の経済力を敵にする勇氣はなく、広範な自治権という名目で独立させるも同然の状態にし放置している。

その後も学園都市のやりたい放題は続き、武器輸出三原則という武器輸出を禁止する法律があるのにもかかわらず軍需企業のように振る舞い、武装した問題のアンチスキルを警察といったが軍隊に等しい組織まで所持するまでになっている。

マスコミも時折思い出したかのように批判報道するが、その批判報道は短くぼかして行うもので一般の国民は大多数はその異常さに気づこうともしない。

今回の超能力犯罪もその異常さが土壤と言えるものだった。そもそも

も超能力を研究する上で優遇する必要があるというが、研究に参加した分に応じて謝礼を払うならともかく大学進学さえ有利にしているという階級制度じみた行き過ぎ行為が元なのだ。

さすがに学園都市も対応協議という形をとったが、それは政治的なアピールに過ぎないのだ。

私も涼子も警察と学園都市の茶番劇に付き合わされているという待遇になっている。

しかし、警察官として任務に従うしかなかった。とにかく命じられた以上はそれを達成すべきなのだ。

そして願わくば今回の命令でも今までのような事件に巻き込まれるというものがありませんように。

そう泉田は祈った。

しかし、泉田の祈りもむなしくやはり今までのように超能力、そして魔術という能力が関わる事件に彼らは巻きこまれてしまうのだった。とある魔術の禁書目録×薬師寺涼子の事件簿

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9441t/>

もしとあるの世界にあの作品のキャラがいたら

2012年1月13日16時54分発行